ザラスシュトラにおける Aša と選択
——ゾロアストラ教終末論の根底に在るもの

岡 田 明 憲

Aša and Choice in Zarathushtra's Thought
——the Foundation of Zoroastrian Eschatology.

Akinori OKADA

In order to understand rightly the eschatology of Zoroastrianism, we ought to direct our notice to Zarathushtra's historical viewpoint. He abandoned the cosmological theory of Eternal Return, and originated the idea of History in which time has both beginning and end.

1. Aša

The term aša-which Zarathushtra had made the very key-stone of his teaching, is equivalent to the Vedic ṛta by etymology. The original concept of these two words is the order of time. In Gatha, however, aša- is very strongly connected with the Law of Retribution and Judgment. Ahura Mazdāh metes out rewards and punishment for actions done, in strictly accordance with this Law. And, in Ys. 31-7, we are told about that Ahura Mazdāh created aša-, so that the Paradise might be accomplished in the Last. Thus, to Zarathushtra himself, aša- meant the Divine Providence which rules the whole of the manifested creation, and by which all creatures are impelled to progress Godwards.

2. Choice

As the very foundation of Zarathushtra's belief in Providence, we must recognize the doctrine of the freedom of the will. God created xratav-, that faculty in man that enables him to choose freely for himself (Ys. 31-11). And urvan- one of the most important conceptions of Zarathushtra's psychological theory, is derived from $\sqrt{\text{var-}}$

(Skt. vr-), to choose. The best teaching, as shown in Ys. 30-2, is to guide man's choice. As dualism that is characteristic feature of Zarathushtra's creed, the choice is ultimately always that between good and evil. So the right choice Zarathushtra exhorted is to choose Aša, not Drug. His historical view which is the foundation of Zoroastrian eschatology, is essentially due to this choice of Aša.

ゾロアストラ教の終末論に就いての研究は、一見それがユダヤ・キリスト教のものと興味ある類似を示す為、かなり古い時代から為されている。これらの先駆的な業績の中で代表的なものとしては、Söderblom, Böklen, Mills 等のものが挙げられるであろう。⁽¹⁾しかし、これらはいずれもそもそもの動機からして、内容に深く踏込むというよりも外面的な関連、比較、対照を目差す傾向に流れやすかった。これに対し、ゾロアストラ教徒の後裔たるパルシーの手になるものとして Pavry, J. D. C. の *The Zoroastrian Doctrine of a Future Life*, 1926, が存す。これは伝統的な教説をよく整理してまとめてあり、現時点でも参照するに足るが、如何為ん形式的な研究を出でず、ゾ教の終末論そのものの特質を把握するには物足りぬものである。本稿は、以上の成果とは若干異った視点からゾロアストラ教の終末論にアプローチを試みるものであり、さしあたってザラスシュトラ自身の教説に焦点を合わせてそれを行ったものである。

言うまでもなく、ゾロアストラ教の終末論が完成された形を見せるのは、ササン朝期以降である。人類と世界の終末を黙示文学的に説くのはパフラヴィー文献であるし、又そこで重要な位置を占める救世主たる第3サオシュヤント Astavañ. ərəta- が出現するのは新体アヴェスターになってからである。ザラスシュトラ自身の教説を述べたガーサーには、後世のゾロアストラ教終末論の特徴をなすところのかかる意味での救世主も、又その救世主の到来にともなうてなされる熔鋳による世界の建直し(2)の思想も未だ明確な形では述べられてはいない。

しかし、ササン朝のゾロアストロ教神学を特徴付ける終末論的発想の源泉は、やはりザラスシュトラ自身の教説にあると言わなければならない。ザラスシュトラの教説において特徴的な事は、それまでの宇宙論的な永劫回帰説から、始めと終りをもった歴史説への移行である。そして、彼によって新たに切り開か

れたこの歴史のパースペクティブのもとで、はじめて「最後のこと」に関わる終末論が成立するのである。

それでは、ザラスシュトラにあってこの歴史のパースペクティブを準備し、それを可能にしたものはそもそも何であったのか——即ち終末論への敷設は何によってなされたのか。この問いに対して答えることが、本稿のテーマである。それ故、それは又同時に、ゾロアストラ教の終末論の根底を明らかにする事でもある。

I Aša

Aša- なる語はザラスシュトラの思想の中核に関わるもので、ガーサーにはこの語が 162 回も出てくる。しかし、この語の意味するものは非常に抽象的な性格が濃厚であって、理解を極度に難しいものになっていると云える。筆者は、この語こそゾロアストラ教の終末論の本質を規定するものであるとする考えから、そのインド・イラーンの背景を辿りつつ、さらにザラスシュトラ自身の思想におけるこの aša- の終末論的意義を解明せんとするものである。

Av. aša- に相当する Vedic の ṛta- は一般に「天則」と訳され、自然、人論の統合原理として正義、秩序等を意味する。ṛta- の語源は、動詞 ar- であり、この動詞の本来の意は in Bewegung setzen⁽³⁾ である。動詞 ar- は天体の運行 (Rg. i—35—9 etc.) や祭祀の際の詠誦 (Rg. i—116—1 etc.) にも使用される。さらに、この語から派生した ṛtu- は季節を、ṛc- は讃歌を意味する。秩序としての ṛta- は天体の運行や季節の推移が規則正しい事と深く関わっているのであって、本来は時の秩序を意味していた。この事は ṛtu- の原意がある一定の時である事、正しく儀軌に則った祭祀を意味する ṛtvij-<ṛtu+yaj- の内容が実際は一定の決められた時に祭祀を行う事等からも窺われる。

しかしながら、Rg- Veda に於いては、この時の秩序とは本来循環的な自然の時に關しての思想であって、そこには未だ現実的な歴史の時の観念は見出せない。これに対し、ザラスシュトラの思想に特徴的な事は、この自然の時から歴史の時への移行であって、彼においてはじめて時が永遠に反復するものとする考えが捨てられ、始めと終りが在るものとされたのである。そして、この始めと終りに aša- が直接関わる。即ち aša- は歴史の始めたる (paourvim) 創

造行為に關与するとともに、又歴史の終りたる (apēmēm) 終末審判にも密接な關係を有している (Ys. 30-4.)。

ṛta- に就いての考察から明らかな如く、aša- は原本的には時の秩序たる性格を有している。その時の秩序たる aša- が創造と終末に關与するとは、そもそも如何なる事なのか。それは、ザラスシュトラにとって、aša- が摂理 providentia そのものを意味していたからに他ならない。次の文はその事を明確に証している。

yastā mantā paouruyō raocābiš roiḡwən xʷāḡrā
hvō xraḡwā dāmiš ašem yā dārayaṭ vahištəm manō……

(Ys. 31—7)

最初に在って樂土を光明によって満たそうと思はれし方、その方は自からの意志によりアシャを創造したる方、それにより最良のウォフ・マナフを保持してられる方、……

ここに樂土 xʷāḡra- が光明 raocah- で満つるとは、まさに終末のありさまを形容したものであり、アフラ・マズダーの創造の目的そのものを示している。そして、この文中での動詞 man- は単に思ふ、⁽⁴⁾考えると云った意味ではなく、erdenken, ausdenken の意である。つまり、目的を意識した思考 ēr-denken であり、終了、完成を予想した構想 äus-denken である。それ故パルシーの学匠 Kanga はこの mantā をアフラ・マズダーの創造にあたっての最初の計画に關係付けている。⁽⁵⁾即ち上に引用した文は、創造の時に既に終末を予想して、それを目差して計画が為されており、ここに却って創造は終末に自からを根拠付けられている事実を示している。そしてその為にこそアフラ・マズダー自からの意志 xratav- により aša- があり、又それによって最良の善心 vahišta・manah- が保たれるのだとするならば、aša は即ち摂理以外の何であろうか。けだし摂理とは、時の最後までも見そなわもところの神が自由なる意志をもって歴史に介入し、御自からの目的を実現せられる行為を意味するのであるから。それ故、摂理は未来の出来事に対する予知を含む。後世のパフラヴィー文献に於いてオーフルマズドの一切知が、アフリマンの後知 (pas-dānišnīh) に対して、過去、現在にとどまらず未来の出来事も知悉すると強調されるのはこれが為である。かくて aša- は終末觀に基礎をおく摂理そのものとして、アフラ・

マズダーの創造行為にあって第一義的な位置を占めているのである。

それでは、ザラスシュトラによる自然的時の秩序から歴史的摂理としての aša- への移行は、如何なるプロセスを経て為されたのであるか、又 aša- 自身に本来その事を可能にするものがあつたのであろうか。この事を理解する為には、aša- と報応・審判説との関係を見なければならない。

既に Rg Veda でも、ṛta- と報応・審判説との関係を述べた次の句を見出せる。

ṛtasya hi śurudhaḥ santi pūrvīr ṛtasya dhītir vṛjināni hanti
..... (Rg. iv-23-8)

実に天則の報酬は多い。(そして) 天則の洞察は不正を破る。……

ここに、現象の奥に潜む法則の恩恵と、それを侵犯するものへの天罰を読みとれる。

しかしながら、ṛta- と報応・審判説との関係は未だ萌芽的であって、寧ろ Rg. Veda にあって直接的に審判説との関連を示すのは、ṛta- の保護者たる Varuṇa 神である。Varuṇa 神は邪なる者に対しては索 pāśa- をもって縛め、水腫病をもって悩ます (Rg. vii—89)。又、善良なる者は死後この神の主宰する楽土に到る (Rg. X—14—7) さらに、この Varuṇa 神に献ぜられる次の句は、報応の観念の存在を示すと共に、その本来の意味を窺せる。

para ṛṇā savīr adha matkṛtāni māhaṃ rājann anyakṛtena
bhojam..... (Rg. ii—28—9)

そして私の為した負債を許せ、王よ、他人の為したる負債のために私を贖はせしむるなかれ。……

今ここに負債 Verschuldung と訳した ṛṇa-⁽⁷⁾ は、ṛta- と同じく語源を動詞の ar- に有す。Grassmann はここから、先に述べたところの ar- の原意たる in Bewegung setzen が展開したところの verletzen の意が ṛṇa- に結びついたと考える。⁽⁸⁾ しかし筆者は、寧ろ ṛṇa- なる語は ar- の語意の一つたる etwa worin hineinstecken に結びつくものと考え。つまり ṛṇa- とは、それによって人をしてある特定の状態に追込んでいく一種の力を予想しているものと見る事が可能である。そしてこれが文字通り mat-kṛta- 即ち自からの行為によるものであるとの意識が、上記の文から明瞭に見てとれるのである。

以上の如き観念を背景に、ザラスシュトラは自からの報応審判説を発展させていく。先ず、ガーサーに於いては、aša- と報応・審判との密接な関係が注目される。

yā frasā āvišyā	yā vā mazdā pərəsaētē tayā
yā vā kasəuš aēnaṇhō	ā mazištəm [a] yamaitē būjim
tā cašməng ɣwisrā hārō	aibi ašā [aibi] vaēnahi vispā

(Ys. 31—13)

はっきりした、あるいは隠れた〔罪〕は、マズダーよ、問い質され(裁かれ)る。あるいは微罪の者、[あるいは又]最大のあがないを与えるべきであつても、それらを眼の光によりて観察しつつ、御身はアジャによりて全てを見(認知し)給う。

ここに pərəsaētē は動詞 fras- (Skt. prach-) の3人称, Du. Prs. Mid., であり、元来問う意である。しかしここでは richten, strafen の意味を有す⁽⁹⁾。būg- の語源は lösen の意の動詞 baog- であり、ここからこの女性名詞は Lösung, Rettung の意となり、さらに又、Buße の意味を有するに至る⁽¹⁰⁾。しかしここで注意すべきは、このあがないとは受くべき正当な罰をうける事を意味していると云う点にある⁽¹¹⁾。以上この文は審判の観念と報応説の存在を示している。

さらに次の文は報応説、及び審判思想と aša- の切り離すべからざる関係を明示するものである。

aṭ ɣwā mōnghāi	taxməmcā spəntəm mazdā
hyat tā zastā	yā tū fafši avā
yā dā ašiš	drəgvāite ašāunaēcā
ɣwahyā garəmā	ā ɣrō ašā. aojaṇhō

(Ys. 43—4)

かく御身を私が力強く神聖なる方と認識いたすでしょう、マズダーよ、その時〔こそ即ち〕、それにより御身が彼の物を把持しているところの手により、彼の物とは不義者に或いは義者に与えるところの報応ですが、[それは又]御身のアジャにより力ある火の熱によるものですが、……

今ここに報応と訳した ašay- を Bartholomae は Los の意に解し、次の如く

説明する, “was einem auf Grund seiner Leistung — in gutem und schlechtem Sinn——zukommt⁽¹²⁾”; この意味で, この ašay- を reward と訳す見解は首肯出来る。⁽¹³⁾さらに問題なのは, この語源が動詞 ar- に在る事である。Bartholomae はこの ar- を in Bewegung setzen の意である先の ar- とは区別する。⁽¹⁴⁾しかし Vedic における動詞 ar- (ṛ) は iyar- の語幹による活用と共に, Bartholomae が gewähren の意とし区別した ar- の活用に相当する ṛṇu-, ṛṇo- の語幹を持つのであって, この両者は本来同一のものであったと考えられる。⁽¹⁵⁾故に, 筆者は ašay- と aša- は同一の語源 ar- を有し, そしてこの事は aša- と報応観念との不可分なる事を示すものと見る。さらにこの事実は, 先述した如く, Vedic における ṛta- と ṛṇa- が共に ar- から来ている事と照応する。ただインドではこの両者の関係が未だ発展した形態をとることなく, 本来これとは別系統のものであったと考えられる karman- の概念が発達すると, その前に影が薄くなり, 或は又, その中に吸収されていったと考えられる。そして, それは Varuṇa 神の位置がインドにおいて生彩を欠いてくる過程と一致する。

次に, 文中の āgrō aša.aojaṇhō は Ys. 34—4 の ātrēm……aojoṇhvantēm aša に関係付けられ, この aša- は善悪の報応に⁽¹⁶⁾関係する。又この aša- と火 atar- の関係は, 後のゾ教に於ける Aša (Phl. Ardwašīst-) の具象的形態を火とする説に連続する。この事はゾロアストラ教の審判に火が重要な役割を担う所から来るものであると同時に, aša- の審判における欠くべからざる位置を示すものである。そしてそれはガーサー以来のゾ教の特徴である。

以上述べてきた如く, ザラスシュトラの教説にあたって, aša- に関する報応・審判の観念は大いに発展をみた。そしてこの事が, 既に述べた如くアフラ・マズダー神が不義を征服し自からの王国を形成せんとして被造物の歴史に介入するといった状況の許で, 必然的に摂理としての aša- を導き出す事になるのである。

ところで, aša- の摂理なる事が, 即ち善に対する恩沢と悪に対する懲罰の報応の真実が明らかになるのは死後の審判に於てであり, さらに究極的には歴史の終末に於てである。つまり摂理が摂理たる事を明らかにする場合は, 歴史の終末に関っている。ここに摂理信仰は必然的に終末論を要請すると共に, 本質

的には、終末論が摂理の根拠そのものとして存在する。この要請と根拠の関係は、ザラスシュトラの教説において常に錯綜する。彼は終末における正義の王国の到来を神に願い求めると共に、又一方では、この終末の事実から報応審判の真実なる事を説教している。そして、この終末の希求と終末の事実との、終末への信仰と終末からの信仰の間にこそ、ザラスシュトラの思想に特徴的な時と云うものに対する新たな解釈が存在するのである。

次に、ザラスシュトラの教説においては、如何なる理由で報応・審判説が強調され高度に発展する事になったのか、即ち摂理信仰の地盤そのものは何であったのか、と云った事を述べてみたい。

II 選択の問題⁽¹⁷⁾

ザラスシュトラによる報応・審判説の強調から摂理への信仰は、彼自身の人間に対する理解と深く関っている。後世のゾロアストラ教では、人間の心を通常次の五つに分類する。1) *ahu-* 2) *daēnā-* 3) *baōjah-* 4) *urvan-* 5) *fravaši-*⁽¹⁸⁾；この内 ザラスシュトラ自身の教説に於て重要なものは *daēnā-* と *urvan-* である。*daēnā-* は Bartholomae に拠ると *inneres Wesen, geistiges Ich*；⁽¹⁹⁾ の意とされるが、この語の本意は心理機能の奥に在ってそれを私の働きとして統一する潜在的な力を実体化したものであり、唯識仏教の末那識 (*mano-vijñāna*) に類似するものである。それ故報応を感受する主体はこの *daēnā-* であり、この事実が *Hāōxt Nask* の場合の如く後世のゾロアストラ教文学で幻視的な表現を見せるに至ったのである。これに対し *urvan-* を Bartholomae は *Seele, Geist*；⁽²⁰⁾ と訳し、英訳も *Soul* とする例が多い。⁽²¹⁾ この語の語源に就いては複雑な問題があって俄かに断じ難いが、筆者はこの語を選ぶ意の動詞 *var-* (Skt. *vr-*) に関係付ける Jackson の見解を支持したい。⁽²²⁾ それは、この *urvan-* が善悪の選択を通じて神の摂理への参与の可否に関ると云う事実があるからである (Ys. 34—2, 51—13 etc. 参)。

ザラスシュトラにおける心の問題の考察は、彼が主体性——自由意志の問題を非常に重視していた事実に直結する。彼の教説は、歴史の善・悪二元の状況下における選択の問題を中心として、常にそこから起こり、常にそこに帰る。そしてこの歴史状況は正・邪の両マソユの選択からそもそも起こったのであり、

それによって彼の教え——正しい選択への決断を促す彼の教えは必然となるのである。

ヤスナ第30章は善惡の起源、その本質、さらに義者と不義者に下される運命等に就いて述べた重要な章である。この重要な章に於てザラスシュトラ自身、選択に関する教えこそ最も勝れたもの (vahištā) としている。

sraotā gōuš.āiš vahištā avaēnatā sūcā manañhā
āvarənā viciḡahyā narōm narəm xʷah'yāi tanuyē
parā mazō yāñhō ahmāi nē sazdyāi baodantō paiti

(Ys. 30—2)

耳によって汝等は聞け、最も勝れたる〔教え〕を、はっきりとした心をもって見よ、二種の選択に就いての選択決定に関する事で、各々の人間が己れ自身の為にするところのもの〔を〕、重大な歩みの前に我々が為に悟らしめんが為に。

ここで問題になるのは āvarənā viciḡahyā である。āvarənā は Gen. Du. の形であるが、この genitive は objective genitive である。āvarəna- の意味は Glaubensbekenntnis とされる⁽²⁴⁾。しかし、この語は選ぶの意の動詞 var- (Skt. vr-) に ā が冠されたものに帰すと見られ、従って選択を意味したと解すべきである。ちなみに Vedic ā+vr- は erwählen の意である⁽²⁶⁾。次に、viciḡa- は genitive をとって Entscheidung の意とされるが⁽²⁷⁾、この語も語源的には動詞 kay- に vi- を付したものであって、kay- には選ぶ意があり、又 vi- (Skt. vi-) は分け區別する意であるので、やはり単なる決定ではなく選択の意を濃厚に持つものである。さらに、今ここに歩みと訳した yāh- は、語源を動詞 yā- (Skt. yā-) ‘to go’ と見たためこの様に訳したのであるが、實際の内容は深く終末論と関っている。そして、この yāh- は広い意味で終末論的に展開される歴史そのものと見るべきである。それはこの世界の終末への歩みであり、又各個人にあっては審判への歩みである。

上記の文で注意すべきは、āvarənā と dual の形をとっている点である。これはザラスシュトラにあっての選択の性格を物語っている。彼にあっては、選択とは善か悪かの二者択一であって、その中間は考えられぬ事であった。確かに Ys. 33—1 には、一見すると善・悪二者の中間の存在を予想させる部分が

ある。そこには hāmamyāsaitē なる語があり、これを証拠としてガーサー自身に後世のゾロアストラ教で説く Hamēstakān (中間界) の思想があったとする説が存在し、又これに対する反論もなされている。ガーサー自身に Ham-⁽²⁸⁾ēstakān の思想が存在したか否かはしばらく措くとして、問題の語を見てみれば、ham- (Skt. sam-) + 動詞 myas-⁽²⁹⁾ であって混交の意である。したがってそれは、あくまで、善或いは悪とは独立のそれ自身での存在を主張しているのではなく、善と悪との二者の存在を前提とし、その両者が混交した状態を指しているにすぎないのである。このように、ザラスシュトラの教説では、質的に、又、実体としては善・悪の二者以外には考えられず、仏教(倶舎論)で云うところの無記の如きものは存在しないのである。

さて、先に引用した Ys. 30—2 の後に善悪の起源についての教説が続く。そしてさらに、この善悪の起源そのものが選択によるものである事が述べられる。

ayā mainivā varatā yē drəgvā acištā vərəzyō
ašəm mainyuš spēništō (Ys. 30—5)

これら二つの霊のうち、不義なる者は最悪の行為を選択した、最も神聖なる(スプンダ) マンユはアシャを「選択した」、.....

varatā は動詞 var- (Skt. vr̥) の過去形である。ここで重要な事は、選択は善のみならず悪の起源にも本質的な関連を有する事が説かれている点である。この事は自由意志と悪との複雑な神学論を予想させる。それは、後世のゾロアストラ教でこの var- に語源を有するところの Phl. varan⁽³⁰⁾ が専ら悪い意味で使用される事と考え合わせて、興味ある問題である。

ザラスシュトラの教説に於ける。さらにはゾロアストラ教の選択に特徴的な事は、それが特に善・悪の価値に関してなされるところにある。一体、Vedic の vr̥- はこの善・悪の価値的選択に限られているわけでも、又、二者択一といった性格のものであったわけでもない。ただ所謂 Henotheism の性格を有する R̥g Veda の宗教にあって、この語は多くの神々の中から、ある特定の一神を選ぶといった場合に使用される例が多い。

.....agnim vṛṇānā vṛṇate kavikratum (Rg. V—11—4)

.....アグニを選ぶことにより聖仙の知恵を有する者を選ぶ。

神格を目的語とするこの用法はガーサーでも又見られる (Ys. 32—2, 43—16

etc.)。さらにガーサーでは、ある特定の信仰(教義)を選ぶ意となる (Ys. 31—3, 47—6)⁽³¹⁾。それでは、ザラスシュトラにあってこの選択の具体的内容はそもそも何なのであろうか。これこそ筆者は Aša の選択であったと考える。

aša- は既に述べた如く、報応・審判説に密接な関係を有しているところの摂理そのものを意味していた。それ故、Aša の選択とは、ザラスシュトラによって説かれたこの摂理を信じ、それに則って正しく選択する事である。即ち aša- を選択し、aša- により選択する事である。そこでかく説かれる事になる。

yezi āiš nōit urvānē	advā aibi deraštā vah'yā
aṭ vā vispōng āyōi	yaḡā ratūm ahurō vaēdā
mazdā ayā ḡsayā	yā ašāṭ hacā jvāmahi

(Ys. 31—2)

もし、それ故、選択の為により良き道があらわに存しないならば、その時は汝等全てに私は来よう、アフラ・マズダーが認め給うこの二つの果報の裁き人として、それによりアシャに則って我々が生きてゆくために。

urvānē は例の動詞 var- の infinitive である。ḡsa- は Skt. amśa- で分前を原意とする⁽³²⁾。ここでは aša- と drug- に関連して dual で用いられ、報応の結果を意味している。即ち、この文はザラスシュトラの宗教の目ざすものが、結局この Aša の選択に帰すことを明らかにしているのである。

以上、ザラスシュトラの教義にあって選択の意義は非常に大である。それは、既に述べた如く、彼が自由意志の問題を重視していたが為に他ならない。ガーサーでは自由意志に関して、アフラ・マズダーの絶対的なそれを指す場合と、人間の側の主体性に関係付けられる場合との両者がある。前者は Ys. 34—15, 44—10, 45—9, 50—11 etc. に見られる usōn (at will), vasnā (according will) であるが、今ここで問題にするのは後者の人間の主体性に関するものである。先ず注目されるものとして次の文がある。

hyaṭ nē mazdā paourvīm	gaēθāscā tašō daēnāscā
θwā managhā xratūšcā	
.....	yaθrā varēnōng vasā dāyetē (Ys.31—11)

マズダーよ、我等が為に最初に、御身が〔我等の〕生とダエーナーとを創造され、さらに御身の心により意志をも〔創造された〕ので、………それによ

り〔人は〕意のままに選択する。

gaēθā- は問題の多い語であるが、ここでは一応生と訳しておく。daēnā- に就いては先に述べた。xratav- は Skt. kratu- で意志を意味する。varəna- は例によって var- を語源とし選択と解すべき。問題は vasā である。この語は、語源を動詞 vas- (wollen) に帰する vasah- の Nom. Sing. が副詞的に使用されたものである。ここにこの語は自発的、主体的なる意を含蓄し、上記の xratav- と相俟って人間の自由意志を証するものである事は明らかである。さらに、その自由意志が選択に直接結びつくことも、上記の文そのものからして確実である。

自由意志説と表裏一体の関係にあるのが責任の問題である。それ故、最後にこの問題に簡単にふれておく。責任の問題は、報応説の本質的契機として既に予想されていたものであり、これが自由意志説と結びついて明確に意識され、ザラスシュトラの教説では強く主張されるところとなってくる。その事をはっきり示すものとして、ガーサーにしばしば出てくる x'āiš なる語がある (Ys. 31—20, 46—4, 51—13 etc.) この語は 'own' の意の hva- (Skt. sva-) の Inst. Pl. の形で、他のだれのものでもない自らのものであるものによりの意を強調している。そして、この他の誰のものでもない、自らのものであるところの行為によって人は裁かれ、楽土へあるいは地獄へと赴く事をガーサーは強調している。

.....

darəgēm āyū təmanhō duš.x'arəgēm avaētās vacō
tām vā ahūm drəgvantō šyaoθanāiš x'āiš daēnā naēšaṭ

(Ys. 31—20)

....., 暗黒の長い年, 悪い食料, 悲鳴, この (ような) 境遇に, 不義者たちよ, 汝等自らの行為によってダエーナーは汝等を連れて行く。

即ち、この運命は自らの責任なのである。

以上、選択、自由意志、責任とザラスシュトラの思想に於いて特徴的なこれらの点を見てきたが、この事を通して確認されるのは、畢竟するにザラスシュトラにあっての人間主体重視の態度である。この人間主体重視の態度が、古代の宇宙論的な世界とは地平を異にする歴史の世界を開く事を可能にし、自然法

則的な性格をもつ aša- をして善・悪報応の理の強調となり、さらに摂理へと導く原動力となったわけである。それ故、人間の主体性への注目がザラスシュトラの歴史観を成立させ、そしてその内容が即ち終末論であったと言える。しかし、主体性そのものの内容をなすところの選択も、自由意志も、又責任も善・悪の二元対立の世界に於いてのみ云云出来る事である。そして、ゾ教の特質をなすこの二元対立は、歴史の開始(創造)と共に現れ、歴史の終了(終末)をもって止むと云う事実がある。即ち、二元理の存在の根拠は歴史そのものであるのである。ここに、主体性そのものが可能になるのは、却って歴史、即ち終末論の許であると言えることになるのである。

註

- (1) N. Söderblom, *La vie future d'après les Mazdèisme, à la lumière des croyances parallèles dans les autres religions*, Paris, 1901. E. Böklen, *Die Verwandtschaft der jüdisch-christlichen mit der parsischen Eschatologie*, Göttingen, 1902. L. H. Mills, *Avesta eschatology compared with the book of Daniel and Revelations*, Chicago, 1908.
- (2) 伊藤義教「サオシュヤントについて」、『西南アジア研究』第17号, 1966年, 55—61頁。
同『ヴェーダ・アヴェスター』筑摩書房, 1967年, 解説, 参照。
- (3) H. Grassmann, *Wörterbuch zum Rig-Veda*, Leipzig, 1873. S. 98 f., 282.
- (4) C. Bartholomae, *Altiranisches Wörterbuch*, Strassburg, 1904, S. 1122.
- (5) E. Kanga, *Gāthā bā Maēnī*, Bombay, 5 th. ed. 1941, pp. 37 f.
- (6) śrudha- を報酬としたのは辻直四郎博士の記による(『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波書店, 1970, 157頁)。この語の原意は生命力を賦与する事であったと考えられる。
- (7) K. F. Geldner, *Der Rig-Veda*, *Harvard Oriental Series*, vol. 33, Cambridge (M.), 1951, p. 312.
- (8) H. Grassmann, op., cit., S. 98, 281.
- (9) C. Bartholomae, op., cit., S. 999.
- (10) ibid., S. 967.
- (11) 伊藤義教『ヴェーダ・アヴェスター』, 333頁, 注(7)。
- (12) C. Bartholomae, op., cit., S. 241.
- (13) M. W. Smith, *Studies in the Syntax of the Gathas of Zarathushtra*, Philadelphia, 1929, p. 100.
S. Insler, "The Gāthās of Zarathustra", *Acta Iranica*, 8, Leiden, 1975, p. 61.
- (14) C. Bartholomae, op., cit., S. 83, 4.
- (15) H. Grassmann, op., cit., S. 98-100.

- (16) M. W. Smith, op., cit., p. 29. 参。
(17) 選択の語を使用したのは、択によしあしを見分けて選ぶ意があるからである。
(18) A. W. Jackson, *Zoroastrian studies*, New York, 1928, p. 123.
(19) C. Bartholomae, op., cit., S. 665.
(20) ibid., S. 1537.
(21) J. H. Moulton, H. Reichelt, Smith, etc..
(22) A. W. Jackson, op., cit., p. 123.
(23) H. Reichelt, *Avesta Reader*, Strassburg, 1911, p. 189.
(24) C. Bartholomae, op., cit., S. 333.
(25) H. Humbach, *Die Gathas des Zarathustra*, Heidelberg, 1959. Bd. 2, Kommentar, S. 20.
(26) H. Grassmann, op., cit., S. 1323.
(27) C. Bartholomae, op., cit., S. 1437.
(28) R. Roth, "Die Seelen des Mittelreichs im Parsismus", *Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft*, XXXVII, pp. 223-9.
J. H. Moulton, *Early Zoroastrianism*, London, 1913, p. 175.
A. W. Jackson, op., cit., pp. 224, 5. 参。
(29) C. Bartholomae, op., cit., S. 1190.
(30) R. C. Zaehner, *The Dawn and Twilight of Zoroastrianism*, London, 1961, p. 41.
(31) この用法を伊藤博士は改信と訳される。(同博士訳『ヴェーダ・アヴェスター』参)
(32) H. Grassmann, op., cit., S. 1.
(33) C. Bartholomae, op., cit., S. 1383.

(おかだ あきのり：東海大学大学院博士課程)